



TITLE:

京大広報 No. 541

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 541. 京大広報 1999, 541: 775-794

ISSUE DATE:

1999-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196570>

RIGHT:



京大広報

No. 541

1999. 12



医学部附属病院新外来棟アトリウムホール 関連記事本文780ページ

目次

大学の動き

- 平成11年度日本語・日本文化
研修留学生の受入れ776
- 厚生補導(SPS)担当教官研究会の開催776
- 平成12年度大学入学者選抜
大学入試センター試験の実施777

日誌777

栄誉

- 山田康之名誉教授が文化功労者に選ばれる ...778
- 朝尾直弘名誉教授、木村 光食糧科学
研究所教授が紫綬褒章を受章778

紹介

- 医学部附属病院新外来棟の竣工780
- 生態学研究センター781

訃報

保健コーナー783

保健コーナー

- 「結核の予防対策」784

随想

- 「百年後の世界」 名誉教授 藤縄謙三 ...786

洛書

- 「京の幾何学」 宮崎興二 ...787

資料

- 平成11年度教育改善推進費
(学長裁量経費)による研究課題788

公開講座

- 終了報告 -
総合人間学部、人間・環境学研究科公開講座
「世紀末社会の不安と希望」792
- 木質科学研究所、農学研究科森林科学専攻
公開講座「森と木と暮らし」792

話題

- 「工学部等文献収集講座
- 工学情報を Get しよう」の開催793
- OPAC 登録件数100万件突破793
- お知らせ
「白馬山の家」の冬季開設794
- 経済研究所公開シンポジウム
「現代経済学のフロンティア」794

大学の動き

平成11年度日本語・日本文化研修留学生の受入れ

昭和57年度から、本学では「日本語・日本文化研修留学生制度」(京大広報 No. 240)による留学生を受入れている。平成11年度は、14カ国から15人を受入れることになり、10月13日(水)留学生センターにおいて三好郁朗留学生センター長はじめ関係教職員の出席のもと開講式が行われた。

また、平成10年度の留学生15人に対する修了式が9月2日(木)留学生センターにおいて開催され、修了証明書が授与された。

本年度の研修の概要は、次のとおりである。

日本語・日本文化研修留学生に対する教育課程、授業計画及び授業時間数

区分	授 業 科 目	授 業 時 間 数		
		第一期 (10月～3月)	第二期 (4月～9月)	計
〔Ⅰ〕 総合	日本語・日本文化ゼミナール	時間	60 時間	60 時間
〔Ⅱ〕 日 本 事 情	① 日本事情(A)	32	26	58
	(ア)日本の社会に関する概説	(10)		(10)
	(イ)日本の法と政治に関する概説	(12)		(12)
	(ウ)日本の経済に関する概説	(10)		(10)
	(エ)各分野の諸問題		(26)	(26)
	② 日本事情(B)	50	42	92
	(ア)日本文学	(20)	(22)	(42)
	(イ)日本文化・歴史(風土を含む)	(30)	(20)	(50)
	小 計	82	68	150
〔Ⅲ〕 特 別 教 育	① 現代産業及び現代文化に関する 参観・研修等	60		60
	② 伝統産業及び伝統文化に関する 見学等		60	60
	③ 特別講義		30	30
	小 計	60	90	150
〔Ⅳ〕 日 本 語	① 日本語概説	60	60	120
	② 日本語強化コース	240	80	320
	小 計	300	140	440
合 計		442	358	800

厚生補導(SPS)担当教官研究会の開催

学生部では、毎年学生の厚生補導(Student Personnel Services)に関する諸問題を討議・研究するため厚生補導担当教官研究会を開催している。今年度も10月16日(土)～17日(日)に琵琶湖畔のホテル

ルークビワで、長尾 真総長、宮崎 昭副学長、学生部委員、学生部職員等42人の参加を得て、「本学における学生の厚生補導に関する重要課題について」と題し、文化・体育サークル、自治会活動団体

の現状、学寮の現状と今後のあり方及び課外活動施設の将来展望などについて活発な討議が行われた。

長尾総長からは、大学審議会答申や独立行政法人化をめぐる学内外の動向を含め「これからは、もっと学生中心の考え方をする必要があり、教育・学習環境等の整備をしていきたい」という挨拶があった。環境保全センターの高月 紘教授からは「京都大学における環境問題について」と題し、本学における廃棄物、騒音等の問題についてスライドを使ったわ

かりやすい講演があった。続いて、神戸親和女子大学長で元本学学生部長の佐野哲郎名誉教授からは「大学紛争から学んだこと」と題し、学生への情報提供の仕方、学生との対応について等の豊富な体験に基づいた講演があり、その後活発な討論が交わされた。また、北部構内部室棟、北白川スポーツ会館、オリンピック・オーク等を見学し、学内各構内に散在する老朽化した課外活動施設の整備について、学生部委員会からも順次要望することとなった。

平成12年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成12年度大学入学者選抜大学入試センター試験が、平成12年1月15日（土）及び16日（日）の両日に実施される。このため、本学では1月14日（金）の授業を休止する。

試験の概要は、次のとおりである。

1. 期日及び試験教科

1月15日（土）

外国語、地理歴史、数学①、数学②

1月16日（日）

国語、理科①、理科②、公民

2. 試験場及び受験者数

農学部試験場（北部構内）

法学部・経済学部試験場（本部構内）

工学部試験場（本部構内）

総合人間学部試験場（総合人間学部構内）

医学部試験場（南部構内）

薬学部試験場（南部構内）

関西文理学院試験場

受験者数 7,376人

日誌

1999.10.1 ~ 10.31

10月1日 アメリカ合衆国 国立科学財団 Michael LESK 情報知的システム課長来学、総長及び関係教官と懇談
4日 京都大学春秋講義 月曜講義（以降の日程は、12日、18日、25日、11月8日）
6日 京都大学春秋講義 水曜講義（以降の日程は、13日、20日、27日、11月10日）
13日 核燃料物質管理委員会
" 環境保全委員会
20日 国際交流委員会

23日 京都大学市民講座（以降の日程は、30日）
26日 中華人民共和国 国家自然科学基金委員会 趙学文 政策局長他4名来学、総長及び関係教官と懇談
" 評議会
31日 アメリカ合衆国 カリフォルニア大学 バークレー校 Robert M. BERDAHL 学長他4名来学、総長及び関係教官と懇談

栄誉

山田康之名誉教授が文化功労者に選ばれる



山田康之名誉教授が平成11年度文化功労者に選ばれた。

山田康之名誉教授は、昭和32年京都大学農学部農芸化学科を卒業、同学部助手、助教授を経て、同57年同学部附属生物細胞生産制御実験センター教授となり、細胞育種部門を担当した。その後、平成2年同学部農芸化学科教授、同6年からは奈良先端科学技術大学院大学教授を併任した。平成6年10月本学を退官し、京都大学名誉教授の称号を受けられた。平成6年11月奈良先端科学技術大学院大学教授に就任、同9年学長となり、現在に至っている。

同名誉教授は、葉の養分吸収のメカニズムを解明するために細胞培養に着目し、昭和43年、当時困難とされていた単子葉植物イネ細胞培養からの個体再生に初めて成功し、禾穀類植物のバイオテクノロジーに先鞭をつけた。また、イネプロトプラストからの個体再生と本手法を応用した雑種イネ作出の基盤的技術を確立した。さらに、植物培養細胞系を用いた植物細胞機能の生化学・分子細胞生物学研究に着手し、数多くの独創的な研究業績を挙げ、我が国における植物分子細胞生物学の基礎を確立した。植物培養細胞において機能発現のモザイク性を認め、

細胞選抜による有用二次代謝産物高生産細胞株を育成し、有用二次代謝産物の工業的生産の基盤を確立したこと、特に、これら細胞系を用いて有用二次代謝物質の産生機構を解明したことは国際的に高く評価されている。特にトロパンアルカロイド・スコブラミン生合成の生化学的・分子生物学的解析により、植物における有用二次代謝の遺伝子発現制御を初めて解明し、単離した遺伝子を用いて薬用植物の分子育種への道を拓いた。また、光独立栄養細胞を用いた光合成機能発現の解析等、数多くの植物機能の解明に貢献した。

同名誉教授は、これらの業績に対し、昭和62年島津賞並びに日本農芸化学会賞、平成元年ウプサラ大学名誉博士、同3年日本学士院賞を授与され、同4年英国国際バイオテクノロジー研究所フェロー、同6年スウェーデン王立科学協会外国人会員、同7年日本学士院会員、本年4月米国科学アカデミー外国人会員に選出されている。

以上のような輝かしい研究業績と、我が国の学術研究と文化の発展における指導的な活躍がこのたびの栄誉をもたらしたものであり、誠に喜ばしいことである。

(大学院農学研究科)

朝尾直弘名誉教授、木村 光食糧科学研究所教授が紫綬褒章を受章

我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、朝尾直弘名誉教授、木村 光食糧科学研究所教授が、平成11年11月3日に紫綬褒章を受章された。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。



朝尾直弘名誉教授は、昭和29年京都大学文学部史学科を卒業、同大学院文学研究科博士課程を経て、同43年文学部助教授、同55年教授に就任し、国史学第二講座を担当した。平成7年停年により退官し、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、京都橘女子

大学教授となり、現在は住友史料館館長、彦根城博物館館長を兼ねている。

同名誉教授の研究は、日本近世史に関するものであるが、大きく三つに分けられる。その第一は近世封建社会成立期の基礎構造に関するものであり、近世社会の成立過程を矛盾の発展において動的かつ具体的に把握した。その分析の緻密さと重厚さは、学界で高く評価されている。第二は、幕藩制国家に関

する研究であり、その中核をなす「将軍権力」が生まれ出される必然性とその過程とを明らかにした。この成果は『将軍権力の創出』として刊行され、平成7年度の角川源義賞を受けている。第三は鎖国研究であり、従来の対外交渉史的な枠組を壊し、国家論の視点から鎖国論を再構築したもので、現在も多くの研究者によってその視角は継承されている。

こうした自身の研究成果のほかに、『京都町触集成』15巻を中心となり公刊し、京都研究のみならず近世都市研究に大きく貢献している。また『岩波講座日本歴史』『日本の社会史』『日本の近世』『岩波講座日本通史』などの編集委員をつとめ、研究動向を総括しその進展をはかった。なお『日本の近世』は毎日出版文化賞特別賞を受けている。学界では、

史学研究会理事長、歴史科学協議会代表委員をはじめ多くの委員をつとめるなど斯学の発展にも寄与している。

同名誉教授は、学内では文学部博物館長、学生部長、文学部長、附属図書館長を歴任するなど、大学行政に多大な功績を残すとともに、国立国文学研究資料館運営協議員・評議員、国立歴史民俗博物館評議員、文部省大学設置・学校法人審議会専門委員、文化庁文化財保護審議会専門委員などをつとめるなど、学外においても大学・文化行政に尽力している。

これらの多年にわたる業績に対して、この度、紫綬褒章を受章されたことは、誠に喜ばしい。

(大学院文学研究科)



木村 光教授は、昭和34年京都大学農学部農芸化学科卒業、同年塩野義製薬(株)に入社、同44年京都大学農学部講師となり、助教授を経て、同52年食糧科学研究所教授に就任、応用微生物学部門を担任し、現在に至っている。

いる。

同教授は抗生物質の研究を通して、放線菌から新しいアミノ脂質を発見し、その構造を決定した。その後、酵母を中心に核酸関係の研究を進め、遺伝子操作による、エネルギー(ATP)やグルタチオン関連物質の高生産株の育種をはじめとして、酵母の分子育種法の開発、解糖系メチルグリオキサル経路の解明とその生理的意義の研究、ストレス応答とグルタチオン代謝、活性酸素ストレス耐性遺伝子の生理的意義の追求など基礎と応用研究の融合を図ってきた。1982年に日本で初めての遺伝子組み換え国際会議(Genetic of Industrial Microbiology)を京都で開催し、事務局長を務めた。この時発表した酵母の遺伝子組み換えに関する論文は、世界的に注目され、被引用回数(サイテーション・インデックス)が世界のランキングで、歴代第2位となった。本年5月アメリカ微生物学会が創立100年を記念して発表し

た「20世紀を通して最も大きな影響を与えた論文」としてあげられている。

また、1984年以来、国際ジャーナル(Appl. Microbiol. Biotechnol.)の編集事務局を務め、日本の研究論文を世界に発信することに務めている。その間、NHK教育テレビ(人間大学)の講師として、バイオテクノロジーの講義を担当、アメリカ微生物科学アカデミー特別会員、日本農芸化学会副会長を務めるなど、一般社会に対する啓蒙と学会の発展に貢献している。

これら一連の業績に対し、アメリカ工業微生物学会チャールス・トム賞、日本農芸化学会賞、日本生物工学会賞、などが授与されている。

他方、同教授は「世界の食と文化」に関するエッセイを多数発表し、その一つ「インド・生物曼陀羅の国」が、日本エッセイストクラブの1995年度ベストエッセイ集『お父つつあんの冒険』(文春文庫、1998)に、俳文「悠久」が、『わが心の春夏秋冬』(第III集)(潮文社、1998)に、各々選ばれている。

これらの多年にわたる海外、国内の業績に対して、この度、紫綬褒章を受章されたことは、誠に喜ばしい。

(食糧科学研究所)

紹介

医学部附属病院新外来棟の竣工

医学部附属病院では、平成12年1月4日からの新外来棟での診療開始に向けて準備を進めているところです。新外来棟は、地上5階、地下2階建てで、建物中央に自然採光のアトリウムホールを設け、その周りに機能的に診療スペースを配置し、患者さんのみならず医療従事者にもやさしい構造となっています。1階には食堂、郵便局、地下1階には、売店、理容室を設置、患者サービスにも配慮しました。4階には、国立大学附属病院として初めてのデイ・サージャリー部門が入ります。デイ・サージャリーとは、原則として、24時間以内に手術を終えて退院できる「日帰り手術」のことです。従来なら入院が必要だった病気でも、早ければ翌日に職場や学校へ復帰できるようになります。その分、患者さんの自己管理責任も大きくなりますが、入院費が軽減されるなどの多くのメリットが期待されます。

この移転に伴い診療科、各種検査室及び受付等の配置が大きく変わるのは勿論ですが、受診のシステムも変わります。新来患者さんや予約なしの再来患者さんは、まず1階の総合受付に来ていただくこととなります。予約患者さんは自動再来受付機を通すだけで、直ちに各診療科に行くこととなります。今後は、病院全体が予約中心の診療体制に移行していきますので、待ち時間が短縮されます。

診察室は、基本的には1医師1診察室とし、患者さんのプライバシーに配慮しました。診療科の表示が「臓器・疾病」別となり、PHS 端末（呼出受信

機）を使用した新しい患者案内システムが導入されます。これにより、従来、診察の順番が来るまで席を離れられないなどの不便が解消され、院内どこにいても順番が来ると連絡が届くようになります。また、診察状況等を案内するためにティッカー（テレビ型表示機）・キオスク端末（パソコン型の案内装置）を各階診療科受付等に設置します。

カルテ管理は患者さんを中心にしたシステムに大きく変わります。まず、1患者1カルテ方式となります。これは、1冊のカルテにその患者さんのすべての診療情報を集め、検査や投薬の重複を避け、包括的な医療を展開するためです。カルテは、病歴管理室で一括管理され、自動取出装置（シングルピッカー）等のカルテ管理装置により、検索・出庫・アライバイ管理が、現在に比べて大幅に容易になります。出庫されたカルテは、新搬送システムにより各診察室に搬送されることとなります。

現在、大学病院に期待されている役割は、望ましい医療人の育成、難治疾患の原因究明と新しい診断、診察法の開発、患者さん本位の質の高い医療の実践などであり、また、地域の中核病院として地域の医療機関との連携を深めながら高度先進医療を担っていくことであります。当病院は、新しい外来棟を有効に活用して、大学の附属病院としての使命を十分に果たすべく、決意を新たにしているところです。

（医学部附属病院）



お薬渡し表示板及び受付カウンター



大型ディスプレイ及び再来受付機

新 外 来 棟 階 別 診 療 科 等 案 内

5 階	-	管理部門（医事課を除く）
4 階	-	外科，呼吸器外科，麻酔科，心臓血管外科，形成外科 光学医療診療部，デイ・サージャリー
3 階	-	眼科，産科婦人科，泌尿器科，小児科，皮膚科，耳鼻咽喉科
2 階	-	血液・腫瘍科，内分泌・代謝科，老年科，放射線科，核医学科 免疫・膠原病科，糖尿病・栄養科，神経内科，消化器科，呼吸器科 腎臓科，循環器科，脳神経外科，歯科口腔外科，中央採血室
1 階	-	総合診療科，整形外科，総合受付，医事課，総合案内，お薬渡し口 院外処方せんコーナー，郵便局，喫茶・軽食
B 1 階	-	外来放射線部，薬剤部，売店，理容室・美容室

生態学研究センター

生態学研究センターは，平成 3 年 4 月に生態学の基礎的研究を推進する全国共同利用施設として設立された。大津市下阪本の琵琶湖畔，旧理学部附属大津臨湖実験所の建物と，北部構内の理学部附属植物園内にある旧植物生態研究施設の建物を理学部から借用して，ここに京都分室を置いた分散組織として出発した。設立時は 5 研究部門であったが，その後 3 研究部門が増設され，現在では生態構造，生態進化，水域生態，温帯生態，熱帯生態，寒帯生態，生態複合，実験生態の 8 研究部門で構成され，教官 17 人（教授 9 人，助教授 6 人，助手 2 人），事務官 3 人，技官 3 人，外国人研究員 3 人，非常勤研究員（COE）3 人，理学研究科学生 53 人ほか，総勢 114 人が在籍している。

本センターの研究は，生態学全体の中でも群集及

び生態系レベルの研究に重きが置かれており，中心的な課題は生物多様性と地球環境の生態学的研究である。これらの研究はプロジェクト研究を中心として行われており，平成 9 年度より本センターを中心として，地球環境問題の国際共同研究計画として位置付けられる次の大型研究プロジェクトを進めている。

- 1．地球圏 - 生物圏国際共同研究（後期）：陸域生態系の地球環境変化に対する応答（平成 9 年度～13 年度）

このプロジェクトは，前期（5 年）は平成 8 年度で終了し，大気，海洋などの広い分野で調査研究が行われてきた。これらの研究を通じて生物圏における炭素循環の概要が明らかになり，炭酸ガスのミッシングシンク（残存炭酸ガスの行方の

謎)は陸域生態系にある可能性が大きいことが解明された。この流れを踏まえて、後期研究は、陸域生態系に焦点をしばり、森林、河川、湖沼、河口域を含む集水域を一つのユニットとして捉え、大気中の炭酸ガス濃度の上昇や気候変化に対する集水域の応答やその他のガス代謝に見られるフィールド機構の解明を目指していく。

2. 文部省 新プログラム 創成的基礎研究：地球環境攪乱下における生物多様性の保全及び生命情報の維持管理に関する総合的基礎研究（平成9年度～13年度）

生物多様性保全策の構築は、生物多様性の生態系機能、維持機構を解明することによって、保全の意義、方法、保全を可能にする人間社会システムとは何かの疑問に答え、これらを生物多様性と人間活動との関わりについての知見、生物多様性保全の基礎理論を世界に向けて発信することを目指している。

3. 日本学術振興会 未来開拓学術研究推進事業：アジア地域の環境保全（平成9年度～13年度）

近年の人口増加に加えて、科学技術の急速な発達と経済流通機構の変革などによる生活様式、産業形態、資源の利用形態などの変化は、自然界の物質循環に大きな歪を生じさせてきた。この研究は、人間がそれぞれの自然生態系の中で独自の文化を育み、社会を形成してきた集水系を中心に研究を進めている。そのモデル集水系として、人間活動による影響の大きな琵琶湖、淀川水系と影響の小さいセレンガ河・バイカル水系を取り上げ、自然生態系と調和のとれた持続的な人類社会を構築するためにはどのような情報が必要であるかを理学、工学、経済学、社会学の各分野の研究者と探ることを目的とし、21世紀への新しいパラダイムの提示、モデル水系における総合情報データベースシステムの作成、人間の生活・水・物質循環・生物多様性を包括した環境保全管理モデルの

確立、これを具体化した標準マニュアルの作成を目指している。

4. 科学技術振興事業団 戦略的基礎研究推進事業：熱帯林の林冠における生態圏・気圏相互作用のメカニズムの解明（平成10年度～14年度）

マレーシア国サラワク州の熱帯林に林冠クレーンシステムを設置し、環境変動の熱帯林の構造と生物多様性に与える影響とそれによって生ずる炭素、水収支の時空間的变化を明らかにし、気候変動の介在する生態圏・気圏の相互作用の解明を目的にしている。

本センターでは共同利用の事業として、毎年、公募研究会（今年度1件、参加者10人）、公募実習（2件、17人）、国際シンポジウム（1件、41人）を実施している。また、本センター内外の研究者を講師とした公開セミナーを月2回程度、さらに、アジア地域の学部学生・大学院生を対象にした国際生物学セミナーも過去4回開催し、今年度は平成12年3月にオーストラリアのクインズランド州で開催する予定である。これらは、いずれも好評で生態学への関心を示すものとして、近年では参加希望者も多いが、すべての要望に応えられないのが大きな悩みである。また、共同研究を推進するために協力研究員を委嘱する制度（任期2年間）を設け、現在、96人の学内外における研究者の協力を得て共同研究を実施している。

共同利用施設・設備としては、琵琶湖に調査船「はす」を保有し、定期観測や調査研究、学生実習など、その利用頻度は高く研究教育に大きな役割を果たしている。その他、安定同位体質量分析計やDNA自動解析シーケンスシステム、物質循環情報解析システムなどを備え活用している。

本センターの活動に関する情報や話題などを全国の研究者に提供するため、「センター・ニュース」を年6回（隔月）発行しており、その部数は約1,150部を超えている。

本センターは10年時限（平成12年度末）として設立され、現在、時限後の新しいセンターの組織作りを行っているところである。近年、生物多様性の研究は国際的に進めるために、国際生物多様性科学研究計画が組織され、その地域である西大西洋・アジア地域国際ネットワークが本センターを事務局として具体的な活動を展開している。また、生物多様性の共同観測が計画されていることや、アジア各国から多様性研究のリーダーシップをとることが期待されている。地球環境問題が深刻化する中で、大学共同利用機関として国立総合地球環境学研究所（仮称）の設立計画が具体化しており、これを支援できる新しい研究センターの設立が数年前から実施されている総長を中心とした京都大学環境フォーラムでも、京都大学内に環境問題を研究する中心的センターが必要であるとの結論に達している。

これから、研究機関ネットワークを強化し、国内外の人材交流も含めた研究交流のスムーズな体制、質の高い研究成果をあげること及び社会的貢献をすることが最も重要な使命であり、大学院研究科にも協力講座として参加し、大学院生の教育を強化し、後継者の養成にも力を注ぐことなどを念頭に新センターの設立を目指している。

本センターは、昨年秋、大津市上田上平野町の「びわこ文化公園都市」の一角に完成した研究実験棟に下阪本の施設のみ移転を終えた。現在、第二期研究実験棟が建設中であり、これが完成すると北部構内に間借りしている京都分室が移転し、来春には統合された組織での研究・教育が実現することとなり、完成が待たれるところである。

本センターの URL は <http://ecology.kyoto-u.ac.jp/> である。
（生態学研究センター）

訃報

赤井 重恭 名誉教授



本学名誉教授赤井重恭先生は、10月16日逝去された。享年89。

先生は、昭和8年京都帝国大学農学部農林生物学科を卒業、同大学院で研究を継続された後に同大学農学部助手、助教授を経て、同25年4月京都大学農学部教授に就任、植物病理学講座を担当された。昭和48年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、京都大学評議員として本学の管理・運営に貢献され、また農学部附属農業研究施設長を3期5年努められた。

先生は、植物病理学、特に病理形態学の分野において多くの業績を残された。戦後の治水事業の整わない水田で冠水によるイネ黄化萎縮病の激発に悩ま

された時期に、いち早くその防御のための共同研究を開始するなど、感染生理、市場病害の分野で常に前進的な優れた業績を残され、内外に高い評価を受けられた。また、その研究範囲は樹病、都市街路樹の保護にも及び、都市計画の分野においても多大な貢献をされた。

このような研究業績に対して日本植物病理学会賞、日本農学会賞が授与された。本学退官後は、石川県農業短期大学長として農業の振興、農学教育及び研究者の育成にも尽力された。

これらの一連の功績により、昭和58年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（大学院農学研究科）

保健コーナー

「結核の予防対策」

結核緊急事態宣言というものの新しい標語をごらんになられた方も多いかと思います。今いったい何が起きているのか、結核とはいったいどんな病気なのか、必要な基礎知識について説明したいと思います。

結核は再興感染症なのか

第二次世界大戦以前は亡国病とも呼ばれ、多くの人を死に至らしめた結核ですが、極めて有効な化学療法剤の開発により、その予後は著明に改善し患者数も順調に減少してきました。ところが、ここ数年その減少傾向が鈍り、1997年の統計では全結核新登録患者数は42,715人と38年ぶりに前年をわずかに上回る事態になりました。

結核は世界的にみても、なお年間800万人の新規患者の発生をみている重大な伝染病であり、WHOは1993年に結核の非常事態宣言を発表して警告を促しています。日本はそれに追従する形で緊急事態宣言を出すに至りました。再興とは、文字通りとれば再び流行してきたととれますが、現実には、結核はずっと流行していたにもかかわらず、あまり重視されていなかった感染症と言えましょう。

結核菌とはどんな菌なのか

1. 結核菌の命名

結核菌は抗酸菌とよばれる細菌の一種で、菌名を *Mycobacterium tuberculosis* (*tuberculosis* の TB をとりドイツ語読みでテーバーと呼ぶことも多い) と命名されています。

2. 結核菌の検査

抗酸菌 (*acid-fast bacilli*, AFB) という名称は、菌体を染色したとき脱色材 (酸) で脱色されにくい性状をいいます (抗酸性, *acid-fastness*)。これは喀痰の塗抹検査としても応用されています。

喀痰の顕微鏡観察による塗抹検査で結核菌が確認された場合、その検体中には $10^4 \sim 10^5$ 個 / ml 以上の菌がいると言われ、感染性が高いと判断されます。その菌数をおおまかに数える方法が、ガフキー (Gafky) 号数 (0 ~ 10号まで) であり、ガフキー陽性とは塗抹検査陽性を示します。また、結核菌は

発育が遅く、小川培地で最大 8 週間ほどかかります。

3. 結核菌の薬剤耐性

米国では複数の抗結核薬が無効な多剤耐性結核菌が AIDS 患者間で流行し、更には医療従事者にまで感染を起こしたため、大きな社会問題となりました。幸いにも、日本で検出される結核菌は、90%以上が薬剤耐性のない、すなわち薬が良く効くタイプの菌です。しかし、なかには薬剤に耐性の菌も存在するため、検出された菌の耐性検査が行われ、それに基づいて治療薬の選択が行われます。

結核の感染と発病

1. 結核菌の感染経路と発病

結核菌の感染経路については空気感染であると認識されています。つまり菌が 1 ~ 3 個付着した飛沫核 (径 5 ミクロン程度) が吸入され、肺胞に定着することにより感染が始まります。

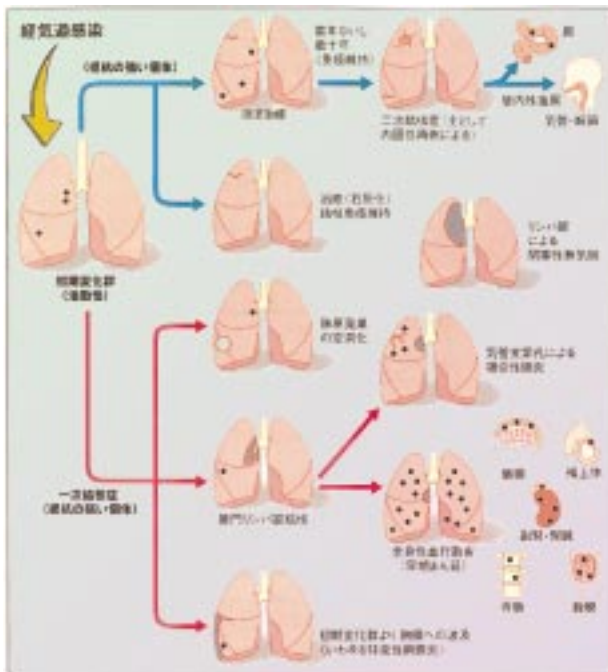
通常は、感染 2 ~ 3 週間には細胞性免疫を中心とした特異的な結核感染防御機構が成立し、病巣は治癒します。しかし免疫能が不十分な場合などでは、そのまま結核の発症に至ります (初感染結核あるいは一次結核症)。幼児や若年者の結核はこのタイプが多く、主として胸膜炎、粟粒結核 (全身播種型結核)、リンパ節結核などの病型をとり、排菌は少ない傾向にあります (図 1 の赤線)。

一方、多くの肺結核は二次結核症とも呼ばれ、活動を停止していた菌が再増殖することにより発症します。加齢、糖尿病、ステロイドや免疫抑制剤の使用など宿主の免疫力の低下に伴い発症すると考えられています。典型例では、主として肺上部に空洞を伴う病巣を形成し、排菌量も多くなります (図 1 の青線)。

2. 結核感染予防 - BCG について

感染の予防に用いられるのはワクチンです。BCG と呼ばれるウシ型結核菌 (*M. bovis*, 結核菌ではない) を弱毒化した生ワクチンが使用されています。現在は凍結乾燥されたものを溶解後、管針で経皮接種する方法が用いられています。日本においては主として乳児期に広く行われており、結核性髄膜炎など重篤な小児結核の防止に寄与しています。ただし、

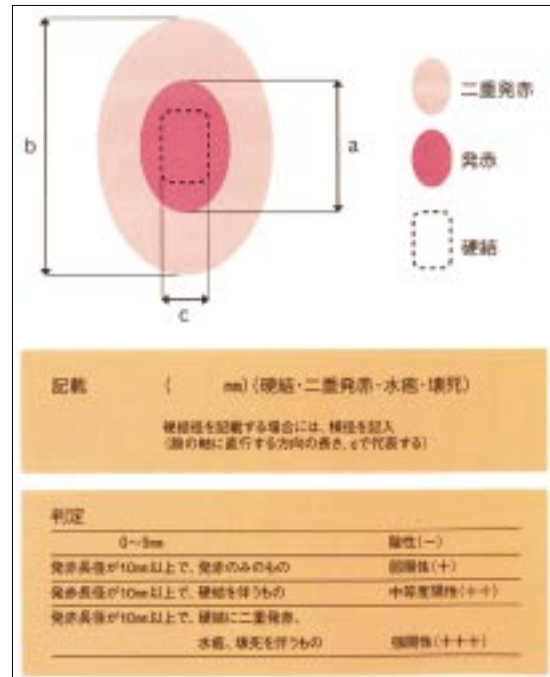
図1 発病の諸相（初感染から発病まで）



図の引用文献

飯沼由嗣, 下方 薫: 抗酸菌検査 - ツベルクリン反応, 抗酸菌遺伝子診断 - 総合臨床 47: 1709-1712, 1998.

図2 ツベルクリン反応の記載と判定



その効果はおよそ10年程度ともいわれており、青年期以降の有効性については期待できません。現在、BCGの再接種の有用性については賛否両論ありますが、結核患者をみる機会の多い医療従事者は、ツベルクリン反応が陰性であればBCGの再接種を考慮しても良いと思います。

3. 結核感染の診断 - ツベルクリン反応 (ツ反) について

結核の感染とともに、生体内では細胞性免疫が成立します。その完成までにはおよそ4～8週間かかるといわれます。

日本におけるツ反の判定は、接種48時間後に発赤径の最大と副反応で行われます(図2)。BCG接種によっても同様の反応が出現するために、一般的にはツ反のみでBCGによるものか結核感染によるものの判定は困難とされています。また、前述したとおり、結核菌の感染から細胞性免疫の成立までおよそ2カ月かかるため、ツ反による感染の診断は感染機会後3カ月程度後でないとできません。

4. 発症と症状

結核菌に感染したすべての人が発症するわけではありません。免疫が正常な感染者では約90%は生涯発病しません。また発病する10%のうち、約半数が

5年以内に発病する早期進行例であり、残りの約半数が数十年を経て発症する晩期再燃例であるとされています。早期進行例では、感染直後1年間で最も発症率が高く、次第に減少していきます。

発症に至った場合は、約70%以上の人が何らかの症状を示します。よくみられる症状として、咳、痰(時に血痰)、発熱、寝汗、倦怠感、胸痛、呼吸困難感などです。これらの症状が持続する場合は医療機関で受診し、早期に診断治療を行うことが重要です。

5. 結核の発病予防 - INH 予防内服 (化学予防) について

感染した場合、発病を予防する方法について説明します。ワクチンではなく抗結核薬を投与します。通常はINH(イソニアジド)という最も強力な殺菌力を持ち副作用の少ない薬剤を半年間投与します。これにより結核の発症を50～70%減ずることができると報告されています。ただし、35歳以上では肝機能障害の副作用が高頻度となるなどの理由により、結核予防法では29歳以下がその適応とされています。

6. 結核の治療

結核治療の目的はできるだけ短期間に効率よく結核菌を死滅させ、持続性残菌を少なくすることです。

肺結核の標準療法はINHとRFP（リファンピシン）という薬剤が必須であり、それにSM（ストレプトマイシン）あるいはEB（エタンブートル）を加えた多剤併用療法が行われます。さらに、治療早期にPZA（ピラジナミド）を加える4剤併用療法が治療期間も短く治療効果が確実であると言われています。

結核未感染の青年層での集団発生

今の日本は結核既感染率の高い高年齢層と極めて低い青年層が混在している状態です。結核に未感染の青年が結核を感染し発症に至ると、同様に結核に対し未感染の青年層の間で大きな集団感染が発生する可能性があります。自覚症状がみられた場合は、直ちに医療機関で受診することが極めて大切なことと考えます。

（医学部附属病院検査部長 一山 智）

随想

「百年後の世界」

名誉教授 藤縄 謙三

いよいよ20世紀の最後の年が迫って来る。そこで思い出されるのが、教養部で西洋史を担当しておられた中原與茂九郎先生のことである。先生は日本におけるシュメール学の開拓者として唯一無二の存在であった。広島で原爆のため御家族を失われ、御自身も被爆されたはずだが、1900年生まれであるため、自分は21世紀まで足掛け3世紀間を生きてみせると宣言しておられた。しかし当時20歳代の私たちにとってさえ、あと50年近くも生きることは、覚束ない夢のような話であった。そして先生は野望を果さず、1988年3月に永眠されてしまった。

この先生とは気質も学風も異なる村田数之亮先生（大阪大学名誉教授）は、同じく1900年生まれであったが、中原先生のようなことは宣言されなかった。しかし90歳をこえても概して健康で、悠然と研究を続けておられた。考古学や美術史の本は大きくて重いので、苦労しておられたが、病院のベッドの中でドイツ語の本を抱きかかえるようにして読んでおられたことがある。晩年には、さすがに執筆依頼が来なくなったので、先生は論文を書いて自費出版されることになった。1997年に2番目の論文が完成したとき、私が2年ほど前にお貸しした小さな参考文献



2冊を返して下さった。私自身は殆んど忘れかけていたものである。しかし、この先生も1998年1月に永眠された。このようにして19世紀の畏敬すべき人物が、お二人とも世紀末を見ずに去ってしまわれたのである。

ところで、紀元前480年の春、陸海数十万人の大軍を率いてギリシア遠征に出発したペルシアの大王は、途中、欧亜大陸の境界で大軍勢を閲兵して意気高揚したのだが、やがて涙を流して泣き出した。親しい重臣が不思議に思って、その理由を尋ねると、百年後にはこの大軍勢のうち誰一人として生き残る者がいないことを思うと悲しいのだと答えたという。

現在この世界で活躍している人間は、百年後には例外なく死に絶えているという鉄則が、古代から厳然と存在していたのである。この鉄則に対しては、ペルシアの大王といえども逆らうことができず、ただ泣くしか対策はなかった。それゆえ十年後の世界の状況について予言することは困難であるが、百年後についてならば、重要な一点について確実に予言することができる。今この雑文を読んでおられる方々は、百年後には全員この世から消えているはずである。

しかしながら21世紀末葉の状況について、果して古来の鉄則に基づいて予言することができるだろうか。クローン人間が活躍しているのではないか。

あるいは、数十年間は仮死状態にあって、再生し、数世代を超えて生きる技術が発明されるのではないか。昔話の浦島太郎や、古代ギリシア伝説のエピメニデスのような人物である。このようにして人類は、自然の限界をも破って繁栄しているだろうか。しかし、それよりも果して地球そのものが無事に存在しているかという点が、むしろ心配であろう。

紀元前5世紀にトゥキュディデスは『歴史』（ペロポネソス戦争史）の序文で、自分の書物は正確を期したため、面白くないだろうが、人間性は不変なので、いつか再び類似の事件が起るであろうから、参考になるはずだと述べている。この言葉は、二度

の世界大戦を通じて実証されたと世界中で喧伝されている。それどころか今年のコソボ戦争の間にも、新聞のコラムに一度ならず、『歴史』の中から鋭い文章が引用されていた。最近の数十年間に兵器は急速に発達し、戦闘方法も大きく変化した。が、人間性は不変であって、当事者間の憎悪にせよ、難民の嘆きにせよ、戦争指導者の名誉心や人気取りにせよ、本質的には変化はない。この人間性は百年後には改善されているだろうか。

（ふじなわ けんぞう 元文学部教授、平成5年退官 専門は古代ギリシア史）

洛書

「京の幾何学」

宮崎 興二

筆者は最近「京の幾何学」について考えることに趣味にしている。古都京都に昔から残る △ といった図形や、五重塔や八角堂といった数字にまつわるかたちについて、歴史や幾何学にはまったくの素人が勝手に思いを巡らすのである。

その結果、平安京の朱雀大路は比叡山と愛宕山の頂上を結ぶ線の垂直二等分線上に決められている、寺の方丈は本来四畳半の小部屋のことであり、三重塔は天台寺院、五重塔は真言寺院のシンボルタワーだった、竪穴式住居は円錐でなく多角錐だった、などと思いついては悦にいらしている。河原町五条に五角堂がある、島原の角屋は六角形だらけ、といったニュースも発掘した。鳥居の足はふつう丸いのに祇園の安井金比羅宮の鳥居はなぜ四角いか、塔は三重や五重というように奇数階になっているのに千本間魔堂にはなぜ十重塔があるか、といった謎を解いた、といいふらしたこともある。

このいかがわしさはマスコミ受けして、新聞や雑誌で紹介されたり、本を出してくれたり、いまは衛星テレビで「京の幾何学」シリーズが放映されたりしている。

となるとつぎは「江戸の幾何学」も考えたい

が、何かと京と江戸が反対になるだけであまり意味はない。内裏びなの殿と姫が左右逆さまに置かれたり、エスカレーターに左右逆さまに乗ったりすることからも分かれるとおりである。

もっと言うと、京は山を後にした高い盆地の中の直線的な碁盤目の都市、江戸は海を前にした低い平野の中の曲線的な放射状の都市である。鳥居の四角い足は京では珍しいが江戸にはいくらでもある。五重塔は京では真言寺院に建つが、江戸では天台寺院に建つ。京ではモチや大根は丸く切るが江戸では四角く切る。

現在でいえば、四角い京には東京人の考えた丸い京都タワーがそびえるが、渦巻く東京には関西人が考えた四角い東京タワーがそびえる。京都の新しいシンボル京都駅ビルは東京の建築家がごじゃごじゃと設計し、東京の古いシンボル国会議事堂は京都の建築家がすっきりと設計した。東大教授が設計した東京の代々木オリンピックプールは東京風で雄大に渦巻いているが、同じころ京大教授の設計した京大体育館は京風で小じんまりと碁盤目になっている。

いずれにしろ「京の幾何学」は不滅である。
（みやざき こうじ 大学院人間・環境学研究科教授）

資料

平成11年度 教育改善推進費（学長裁量経費）による研究課題

本年度の教育改善推進費（学長裁量経費）については、各部局からプロジェクトの申請が86件あり、42件が採択されました。

採択された研究課題及び代表者等は、次のとおりです。

プロジェクト課題	代表者所属・職名・氏名	プロジェクト関連部局
全学共通科目「物理学実験」教育におけるシステムの改善整備	総合人間学部 学部長 林 哲介	総人，工，理， 人環
総合人間学部図書館（全学共用施設）における自学自習環境の整備構築	総合人間学部 学部長 林 哲介	総人，人環，図 書館
「文学部研究紀要」の電子ジャーナル化のための基礎的研究	文学研究科 教 授 永井 和	文
法学部における新科目「司法制度論」のあり方について	法学研究科 研究科長 中森 喜彦	法
経済経営学教育におけるモデル作成能力の改善，高度化のための研究	経済学研究科 研究科長事務取扱 赤岡 功	経
化学実験体験プログラム	理学研究科 教 授 大須賀篤弘	理
本格的な観測機器の体験を通じた独創性の育成	理学研究科 助 手 菅井 肇	理
医学における形態学教育のための新しい教育プログラムの開発	医学研究科 教 授 塩田 浩平	医，病院，メ ディア
薬物血中濃度測定に基づく医薬品の適正使用に関する教育の推進	医学部附属病院 教 授 乾 賢一	医，病院，薬
薬学領域における高度総合物理化学教育システムの構築	薬学研究科 教 授 中川 照眞	薬
大学院重点化に伴う工学系研究科の学生財確保に関する調査研究	工学研究科 教 授 足立 紀尚	工，エネ科，情 報
「エネルギー科学」テキストシリーズの検討	エネルギー科学研究科 教 授 若谷 誠宏	総人，エネ科， エネ研，原子炉
海洋環境を対象とした生態学の教育システムの開発	農学研究科 教 授 内田 有恆	農
大学院におけるマルチメディア活用の臨地研究に関する調査研究	アジア・アフリカ地域研究研究科 研究科長 坪内 良博	ア・ア
独立研究科と学部教育のあり方	人間・環境学研究科 教 授 西井 正弘	総人，人環
ワイアレス LAN 環境下におけるマルチメディアデータ共有システムの研究開発	情報学研究科 教 授 高橋 豊	情報
ゲノム情報教育システムの整備	生命科学研究科 研究科長 大山 莞爾	生命
化学薬品の適正管理と環境安全教育の充実	環境保全センター センター長 吉田 郷弘	
学士課程カリキュラム開発に関する研究集会の実施	高等教育教授システム開発センター 教 授 田中 每実	高等教育
相互授業参観の意義・課題の検討	高等教育教授システム開発センター 教 授 田中 每実	高等教育
インターネットを利用した実験的実習成果の公開	高等教育教授システム開発センター 教 授 田中 每実	高等教育
国際高速ネットワーク回線を利用した遠隔講義環境の研究	総合情報メディアセンター 教 授 美濃 導彦	超高層 高等教育， メディア，留学セ
CALL 授業のためのマルチメディア教材の開発研究	総合情報メディアセンター 教 授 壇辻 正剛	総人，情報，メ ディア，留学セ
医療技術教育における分子生物学基礎実習の充実と教育設備改善計画	医療技術短期大学部 教 授 川寄 伸子	医短

プ ロ ジ ェ ク ト 課 題	代表者所属・職名・氏名	プロジェクト関連部局
全学共通科目の学習に必要とする学生用図書及び大学院生の研究を支援する専門参考図書の充実整備	附属図書館 館 長 菊池 光造	全学部
留学生の科目履修のための情報資料提供	附属図書館 館 長 菊池 光造	全学部
学生相談におけるインターネット活用の可能性ならびにその問題点についての研究	学生部(カウンセリングセンター) センター長 岡田 康伸	カウンセリングセンター
総合人間学の可能性：21世紀における新たな視座の確立	総合人間学部 教 授 稲垣 直樹	総人，人環
実務志向型の倒産処理研究・教育のあり方について	法学研究科 教 授 山本 克己	法
アフリカ地域研究と国際協力 ～現状把握と新たな枠組みの検討～	アジア・アフリカ地域研究研究科 教 授 田中 二郎	ア・ア
東南アジア映像資料の修復と映像ライブラリーの構築	東南アジア研究センター 教 授 田中 耕司	ア・ア，東南
進化論を接点として人文・社会科学と自然科学の接合を考える	人文科学研究所 教 授 阪上 孝	経，エネ科，人環，人文
京都大学の原子力研究教育と原子炉実験所の将来構想	原子炉実験所 所 長 井上 信	理，医，工，エネ科，放生研，化研，エネ研，原子炉
リサーチ リソース ステーション候補地の環境調査と評価	霊長類研究所 教 授 松沢 哲郎	霊長
情報公開法の施行に伴う学内実施体制の整備及び機能の充実	総務部 部 長 朝倉 信裕	全学
欧米における文学と民族観の相関研究	文学研究科 教 授 宮内 弘	文
研究・教育と情報公開	法学研究科 教 授 田中 成明	法
京都大学学生の個人ベースでの海外における活動に関する調査	理学研究科 教 授 瀬戸口烈司	総人，理，農，ア・ア，生態，東南，博物館，霊長
若手研究者（院生含む）の学際分野における共同研究の推進 - 植物ホルモン未知受容体の単離への挑戦 -	化学研究所 教 授 坂田 完三	農，化研
京都大学学内漢籍所在調査	人文科学研究所 教 授 高田 時雄	総人，文，人文，図書館
エネルギーの高品位による環境調和型の材料高次機能加工システムの確立(大阪大学接合科学研究所との共同推進研究：大型特定研究 4年次)	エネルギー理工学研究所 教 授 吉川 潔	工，エネ科，エネ研，阪大(接合研)
ストック重視型の大学キャンパスの施設整備方法の研究	施設部(工学研究科) 教 授 宗本 順三	工

平成11年度学術研究奨励金による研究課題

申請が185件（人文・社会系16件，理学・工学系83件，医学・生物系86件）あり，50件（人文・社会系7件，理学・工学系21件，医学・生物系22件）が採択されました。

採択された研究課題及び研究者は，次のとおりです。

【人文・社会】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
キナウル語動詞の形態統語論的分析と資料のデ - タベ - ス化	文 学 研 究 科 助 手 高橋 慶治
医療倫理学教育に用いる教育材料開発に関する研究	医学部附属病院 助 手 浅井 篤
遺伝子組み換え食品のラベル表示に関する厚生経済学的研究	農 学 研 究 科 助 手 浅野 耕太
イブン・アラビ - 学派の地域間比較に関する文献学的研究	アジア・アフリカ 地域研究研究科 助教授 東長 靖

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
史的音韻論（15世紀ベトナム語音韻論）	総合情報メディアセンター 助手 清水 政明
東南アジア英領植民地と英国における移民政策の比較研究：植民地と宗主国の労働力管理の弁証法的関係への視点	東南アジア研究センター 助教授 石川 登
デル・リット氏書簡史料コレクションに関するカタログ作成準備	人文科学研究所 助手 森本 淳生

【理学・工学】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
膨張係数スペクトロスコピ - を用いた高分子薄膜ダイナミクスの研究	総合人間学部 助手 深尾 浩次
官能基を有するシクロペンタジエニルイリジウム錯体の合成とその機能に関する研究	総合人間学部 助手 藤田 健一
低軌道ビ - コン衛星を用いた電離圏観測システムの構築	理学研究科 助手 齊藤 昭則
熱輻射強度測定による前駆濡れ転移の臨界ゆらぎの研究	理学研究科 助手 大政 義典
計算機シミュレーションによる高分子の非線形レオロジ - の研究	理学研究科 助手 山本 量一
乱泥流堆積物の組織解析	理学研究科 助手 酒井 哲弥
玄武岩・カンラン岩のオスミウム同位体・白金族元素存在度から地球内部地図を作る試み	理学研究科 助手 鈴木 勝彦
低次元磁性を示すトリルチル化合物の固体化学的研究	理学研究科 助手 加藤 将樹
脂質の非二分子膜構造の界面化学と両親媒性高分子による脂質液晶相の分散安定化	薬学研究科 助手 中野 実
GaN 系半導体の結晶構造制御に関する研究	工学研究科 助手 船戸 充
電子デバイスへの応用を目的とした炭化シリコン基板上への窒化アルミニウムの高品質結晶成長	工学研究科 助手 須田 淳
伸長固定化 DNA を用いた連結酵素の一本鎖開裂部位探索機構の解明	工学研究科 助手 加畑 博幸
合意形成を考慮したフェイス・トゥ・フェイスの交通行動モデルに関する研究	工学研究科 助手 松島 格也
無機 - 有機複合骨格を用いた新規多孔性固体の開発	工学研究科 助手 近藤 満
土壌水の攪乱採取手法の開発による不飽和土壌中の溶存物質移動現象の解明	農学研究科 助手 小杉賢一郎
森林土壌の年齢と酸暖衝能の関係に関する研究	農学研究科 助教授 大手 信人
森林生態系から発生する亜酸化窒素の発生過程解明	情報学研究科 助手 木庭 啓介
砕波帯を含めた沿岸域の流動に関する現地観測	防災研究所 助手 馬場 康之
反応拡散系に現れる螺旋進行波の発生機構の数理解析	数理解析研究所 助手 長山 雅晴
引張り破断した金属薄膜の先端部分に観察される特異な変形挙動の解明	原子炉実験所 助手 佐藤 裕樹
横の大きさ，形，スピンの起因する化学同位体効果に関する研究	原子炉実験所 助手 藤井 俊行

【医学・生物】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
高等真核生物の遺伝情報維持に関与する DNA 修復酵素の同定と生物学的機能の解析	理 学 研 究 科 助 手 張 秋海
遺伝子のエクソン - インtron構造を指標にした後口動物の分子系統学	理 学 研 究 科 助 手 和田 洋
SL/Kh マウス Pre - B リンパ腫発生の分子機構	医 学 研 究 科 助 手 鶴山 竜昭
低分子量 GTP 結合蛋白質 Rho の標的蛋白質の神経組織における機能解析	医 学 研 究 科 助 手 木村 一志
血管内皮から血液細胞への運命決定の分子機構に関する研究	医 学 研 究 科 助 手 小川峰太郎
過分極誘発陽イオンチャンネルのカルシウムイオンによる活性化機構の解析	医 学 研 究 科 助 手 石井 孝広
アポトーシス細胞死の核変化を制御する因子の作用機構の解析	医学部附属病院 助 手 高橋 淳
リアルタイム共焦点顕微鏡を用いた神経細胞におけるカルシウム動態の研究	医学部附属病院 助 手 武地 一
腎障害時における薬物尿細管分泌の変動に関する研究	医学部附属病院 助 手 増田 智先
プロスタグランジン受容体による生殖生理の調節機構に関する研究	薬 学 研 究 科 助教授 杉本 幸彦
植物ウイルスの複製に関与する宿主因子の同定とその解析	農 学 研 究 科 助 手 海道 真典
超好熱古細菌ゲノムの体系的機能解析のための分子遺伝学的基盤の確立	農 学 研 究 科 助 手 野村 紀通
タンパク質の温度適応機構の分子生物学的解析	情 報 学 研 究 科 助 手 白木 琢磨
雌性生殖器官で発現する造血因子エリスロポエチンのエストロゲン応答領域欠損マウスの作出とその解析	生命科学研究科 助教授 増田 誠司
免疫系細胞の生体内における移動と細胞走化因子受容体	生命科学研究科 助 手 高原 和彦
ヒト $\gamma\delta$ 型 T 細胞の有する腫瘍特異性の解析とピロリン酸モノエステル抗原認識機構の解析	生命科学研究科 助 手 田中 義正
血球系細胞に分化した胚性幹細胞から単離した新規分泌タンパク質 ESOP - 1 の解析	遺伝子実験施設 助教授 田代 啓
博物館標本を用いた日本産哺乳類の分子系統学的研究	総 合 博 物 館 助 手 本川 雅治
亜鉛フィンガーモチーフの DNA 認識に基づく新規転写制御物質のデザイン	化 学 研 究 所 助 手 永岡 真
遺伝子組換え作物の環境中への拡散に関するモデル解析	木質科学研究所 助 手 本田 与一
細胞死における新規タンパク質分子 Mst と TRP32 の細胞内生理機能解析	ウイルス研究所 助 手 李 慶權
神経発生における bHLH 型転写調節因子の役割解析	ウイルス研究所 助 手 富田 江一

平成11年度学術出版助成金による研究課題

申請が1件（人文・社会系1件）あり、採択されました。

採択された研究課題及び研究者は、次のとおりです。

【人文・社会】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
特徴ある公施設法人（etablissement public）たるフランス大学の管理・運営	高等教育教授システム開発センター 助教授 石村 雅雄

公開講座

終了報告

総合人間学部，人間・環境学研究科公開講座
「世紀末社会の不安と希望」

総合人間学部と人間・環境学研究科では共催で，一般市民を対象として9月13日（月），14日（火）の2日間，人間・環境学研究科大講義室において，公開講座「世紀末社会の不安と希望」を開催した。受講生は115人であった。

今回の公開講座は，世紀末の現在，雇用不安や高齢化が進む中，現在の文化や精神状況を既存の学問にとらわれず，さまざまな角度から考察することを目的とした。

なお，講義題目，講師は次のとおりであった。

高齢化社会の不安 - 社会保障とその課題 -	総合人間学部教授	西村 健一郎
ファウストと世紀末日本の悪魔	人間・環境学研究科教授	高橋 義人
不安と希望の病理	人間・環境学研究科助教授	新宮 一成
ゆく時，くる時 - 時間の感覚について -	大阪大学文学部教授	鷲田 清一
シンポジウム	大阪大学文学部教授	鷲田 清一
	人間・環境学研究科助教授	新宮 一成
	人間・環境学研究科助教授	大澤 真幸
(司会)	人間・環境学研究科教授	佐伯 啓思

(大学院人間・環境学研究科)

木質科学研究所，農学研究科森林科学専攻公開講座
「森と木とくらし」

木質科学研究所と農学研究科森林科学専攻では，10月16日（土），17日（日）の両日午前10時から午後4時まで，木質科学研究所木質ホール（宇治市五ヶ庄）及び宇治川左岸（宇治市宇治）において，公開講座を開催した。

この講座では，一般市民を対象に木質科学研究所と農学研究科森林科学専攻で展開されている研究成果を選び，「森と木とくらし」と題する講義と木質科学研究所の地元，宇治市ゆかりの宇治上神社，興聖寺を訪れ樹木等の観察を行った。

受講者は60人で，会社員，公務員，学生，主婦など幅広く，木材，森林に対する関心の高さを示すことになった。

講義題目と講師は次のとおりであった。

「森とけものたちの生活」	農学研究科講師	高柳 敦
「森林と水災害，土砂災害との関係」	農学研究科教授	水山 高久
「木をつくる細胞のいとなみ」	農学研究科助教授	高部 圭司
「シロアリが木材をかじる音を聴く - 最新シロアリ探知技術 -」	農学研究科助手	築瀬 佳之
「快適で長持ちする住まい」	木質科学研究所教授	今村 祐嗣
「アグロフォレストリーでの熱帯林再生」	農学研究科教授	渡辺 弘之
「木と文化財」	木質科学研究所教授	伊東 隆夫
「宇治川沿いの文化財と樹木ををたずねて」	木質科学研究所助教授	矢野 浩之

(木質科学研究所)

話題

「工学部等文献収集講座 - 工学情報を Get しよう」の開催

近年、図書館を取り巻く環境も著しく変化し、これまで図書館が扱ってきた文献検索とその入手作業は、インターネットの普及により、自宅で論文の入手が可能になったり、CD-ROMの利用などその方法は、多様かつ高度になってきている。本学では、平成10年度に総合情報メディアセンターが、1,200台の端末を全学的に分散配置し、学生にとってはこれらの利用がさらに簡便となった。そこで、工学部図書室職員で「工学部等文献収集講座 - 工学情報を Get しよう」を企画したものである。

企画から、資料作成、講師担当まで、このような取り組みは、工学部では初めてである。受講対象は、工学部の学部学生、大学院生、教官、日程は、10月5日（火）と12日（火）午後1時から、講師は工学部の図書室職員が一人約15分、「インターネット情報の活用」、「電子ジャーナルの利用」など11テーマを、また教官が「Chemical Abstracts を使いこな



す」及び「私の文献収集法」についてそれぞれ担当した。

説明内容は両日とも同一で、初心者向けからベテラン向けまで、図書館（室）の使い方や情報の入手方法など幅広く紹介した。

両日とも100人以上の参加者があり、計250人余りという盛況であった。

（工学部等事務部）

OPAC 登録件数100万件突破

本学の図書館（室）で入力を進めている OPAC（オンライン目録検索システム）の登録件数が10月22日に100万件を超えました。本学には600万冊近い蔵書があり、全体から見ると6分の1と緒についたところですが、これを機会に1日も早い全学図書の完全な目録データベース化を目指し、努力を続けています。

なお、記念となる100万件目の入力は、工学部（地球系）図書室の『京都大学百年史』で、先日、菊池光造附属図書館長より記念の楯が贈られました。（附属図書館）

附属図書館ホームページの蔵書検索画面
（<http://kensaku.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/>）

お知らせ

「白馬山の家」の冬季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設である「白馬山の家」を、今冬については下記のとおり開設しますので、ご利用ください。

この「山の家」は、中部山岳国立公園白馬山麓^{つがいけ}の杓池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、積雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えており、初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

建物は山小屋風の木造地上2階、地下1階建てで、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

なお、今秋、屋根、外壁等を修理し、装いも新たになりましたので、是非、ご利用ください。

記

1. 名 称 京都大学^{はくば}白馬山の家（電話 0261 83 2405）
2. 所 在 地 長野県北安曇郡小谷村大字千国字柳久保乙869の2
（交通機関）
JR 大系線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親の原」^{おや はら}下車、徒歩約20分
3. 開設期間 12月20日（月）～1月10日（月）並びに2月20日（日）～4月10日（月）
4. 収容人員 26人
5. 所要経費 1人1泊 使用料120円、ほかに食費、暖房費等実費
6. 申し込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室（総合体育館内、電話学内2574）に照会してください。
7. そ の 他 当施設には、駐車場がないため、自動車での利用は避けてください。

経済研究所公開シンポジウム「現代経済学のフロンティア」

経済研究所では、財団法人総合経済研究所と共催で公開シンポジウムを下記のとおり開催します。

記

日 時 1月14日（金）午後2時から5時まで
会 場 京都市国際交流会館（京都市左京区粟田口鳥居町2-1）

プログラム

1. 企業組織と企業統治
小佐野 広（経済研究所教授；企業金融，労働経済学，マクロ経済学）
2. ゲーム分析と経済学の領分
今井 晴雄（経済研究所教授；ゲーム理論）
3. 複雑系空間経済学 - 都市・地域・国際貿易
藤田 昌久（経済研究所長；都市・地域経済学）
4. 金融工学とは何だろうか
刈屋 武昭（興銀第一ファイナンス・テクノロジー株式会社研究理事；金融工学）
5. 総合討論：質疑応答
座 長：佐和 隆光（経済研究所教授；計量経済学，エネルギー・環境経済学）
討論者：小佐野 広，今井 晴雄，藤田 昌久，刈屋 武昭

対 象 市民一般・学生

定 員 200人（先着順）

入場無料（申込不要）

問い合わせ先 経済研究所庶務掛 TEL 075-753-7102